

震災後の日本観光に関する感性論的考察

——浅草三社祭の事例——

牧野圭子

はじめに

本稿では、観光を「感性的営為」としてとらえる立場（津上，2010）¹⁾から、震災が観光地における感性的経験に及ぼす影響について論じる。本稿は、震災によって観光地に生じた様々な環境の変化が、観光地に見出される感性的質（aesthetic qualities）にどのような変化をもたらすか、という問題について検討することを目的としている。

Berleant and Carlson（2007）は、「人間環境の美学」を掲げるにあたり、我々が知覚する風景には、観察対象となる風景（“observational landscape”）と、知覚者自らが関わる風景（“engagement” landscape）があると述べている²⁾。観照できるのは前者であり、後者の場合、知覚者自身も風景の中に能動的に加わるという³⁾。例えば、日本の庭園の場合、枯山水は観察対象となる風景だが、回遊式庭園は自らが関わる対象としての風景ということになる（Berleant and Carlson, *Ibid.*, p. 25）。

観光を美学の視点からとらえる際も、この分類を用いることができるだろう。ただし、知覚対象別に分類できるとは限らない。同じ知覚対象でも、観察対象として知覚される場合もあれば、観光者自身が関わる対象として知覚される場合もあると考えられる。特に、祭の見物においては、両方の可能性を考慮する必要があるのではないだろうか。祭は、純粹に見物客として知覚することも可能だが、その空間の中に巻き込まれつつ知覚することもできるからである。

以下では、日本の代表的な観光地の一つである浅草に焦点を当て、三社祭について検討する。手法として、実際の観察、聞き取り、統計資料

等を用いた分析を行う。

1. 震災による外国人観光客数の変化

2011年3月11日（金）の東日本大震災以来、日本に来る外国人観光客が減っている。日本政府観光局が発表している「訪日外客数・出国日本人数」の調査結果を参照すると、以下のことが読み取れる⁴⁾。

外国人観光客は、震災前の2010年4月に788,212人であったのに対し、2011年4月は295,800人であり、合計で62.5%減となっている。2011年5月は358,000人と少し回復しているが、前年の同月と比べると50.4%減である。このように、全体的に大きく落ち込んでいるものの、反応は国によって多少違うようだ。

内訳を見ると、2010年4月の調査では、韓国が最も多く（189,582人、24.5%）、次いで中国（150,788人、19.13%）、台湾（109,680人、13.92%）である。一方、2011年4月の調査では、中国が最も多く（76,200人、25.76%）、次いで韓国（63,700人、21.53%）、台湾（35,800人、12.10%）となっている。同月の前年比は、台湾が-67.4%、韓国が-66.4%であるのに対して、中国は-49.5%である。

しかし2011年5月の内訳を見ると、再び韓国が一番多くなり（84,100人、23.49%、前年比-58.3%）、次いで台湾（68,000人、18.99%、前年比-40.4%）、中国（58,700人、16.40%、前年比-47.8%）となっている。

2. 観光地としての浅草

浅草は、以前から国内有数の観光スポットになっている。このことは、観光客数に関する統計資料から確認できる。

「平成22年度台東区観光統計・マーケティング調査」によると、2010年1月から12月までの台東区全体（浅草地区、上野地区、谷中地区、浅草南地区の合計）の観光客数は、推計約4,083.9万人であり、浅草地区の観光客数は、推計約1,975万人となっている⁵⁾。この調査は二年に一度行われているが⁶⁾、平成20年度の前回調査と比べて、約149万人増加しているということである⁷⁾。

上記の観光客数のうち外国人は、台東区全体（上記の4地区合計）で約413万人と推計されている。この値は、二年前の前回調査より約222万人多いということである⁸⁾。外国人観光客数の伸びが著しいことがわかる。

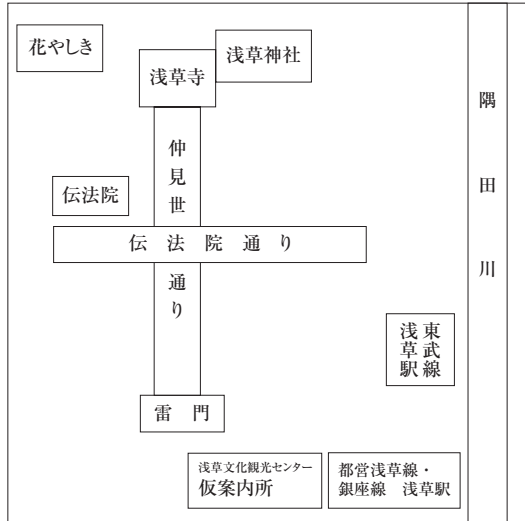


図1 浅草寺・浅草神社周辺位置関係の概略（著者作成）

2009年2月13日
（金）9時から17

時までには台東区が浅草寺で行った調査では、境内における外国人来訪者およびその内訳は以下の通りであった⁹⁾。合計1,690人、中国本土365人（21.6%）、欧州337人（14.94%）、韓国240人（14.20%）、オセアニア228人（13.49%）、台湾201人（11.89%）。先に紹介した震災前の全国調査の内訳と比べると、中国が若干多く、韓国が少ない。

では、実際にどのような観光客が浅草を訪れ、何をしているのだろうか。2008年9月上旬から10月上旬にかけて台東区が上野地区と浅草地区で行った「着地側調査」¹⁰⁾の結果を参照してみたい。浅草地区の有効回答336人の内訳は、61歳から70歳までが多く、51歳以上が61.8%を占めたという。また、活動目的で最も多かったのは「寺社参拝」（88.3%）であり、次いで「食事・喫茶」（78.4%）、「買物」（75.1%）、「散歩・散策」（74.9%）という順になっている。

もっとも浅草では、飲食店や買い物できる店は仲見世通りや伝法院通り付近に多くあり、寺社からさほど遠くない（図1）。そのため、参拝、飲食、買い物等の複数の活動を行うことが容易であると思われる。

3. 震災後の浅草

浅草では、東京の他の地域と同様に、震災による直接の被害はさほど大きくなかったようである。しかし、震災の影響を間接的に受けている可能性があるのではないだろうか。例えば、自粛ムードが続く中で、観光客が減っているということはないのだろうか。以下では、実際の観察と簡単な聞き取りを通してこのことを確認したい。

図2は2011年5月25日（水）午前11時過ぎの仲見世である。やや曇っているものの気温は適度であり¹¹⁾、観光客は比較的多く来ているようだった。修学旅行生と思われる団体も見かけた。だが、奥まで歩いて行くと、だんだん人が少なくなってきた（図3）。伝法院通りも人は少なかった。

浅草文化観光センター仮案内所（図1）で尋ねたところ、客足は少し回復し始めているが、まだ少ないという。特に、中国人が減ったということだった。

仲見世中ほどにある土産物店（この店では、置物や扇子等、食べ物以外の商品を扱っている）でも同様に尋ねたところ、買い物客は減り、特に外国人が来なくなったということだった。確かに、外国人はほとんどいないようだった。以前仲見世でよく聞こえてきた中国語も、この日は聞こえてこなかった。

ところが、仲見世を入ってすぐのところにある和菓子の老舗では、昨年と同じ頃と変わらないと言われた。ゴールデンウィークの時点で既に



図2 平日昼前の仲見世・手前
(2011/05/25)¹²⁾



図3 平日昼前の仲見世・奥
(2011/05/25)

買い物客は多くなっていたという。実際、聞き取りを行っている間にも、買い物客は来ていた。ただし、アジアの人は少ないということだった。

脇道に入ってすぐのところにある老舗の料亭にも、日本人客が列を作って並んでいた。

以上のことから、浅草観光について調べる際に留意すべき点として、以下の三点が浮かび上がってきた。

- 1) 日本人観光客に関して言えば、2011年5月末時点で、震災の影響はさほど受けていないようである。
- 2) 冒頭に紹介した日本全体のデータによれば、震災後、4月の時点では、外国人観光客は激減していたが、中国人は相対的に多く来ていた。一方、浅草では、中国人が減ったという回答を得た。もともと浅草観光において中国人が多かったため、比率でいうと実は他の国の人ほどではなくても、激減したように知覚されたのだろうか。あるいは、他の場所に比べて実際に浅草に来る中国人が特に減ったということがあるのだろうか。この点については確認できない。
- 3) 商店への震災の影響は、同じ浅草でも、扱う商品や場所によってかなり違うのではないだろうか。菓子等の食品店や飲食店は、日本人観光客が来るため、あまり影響を受けていないように見受けられる。

4. 三社祭の分析

4-1. 三社祭の概要

三社祭は浅草の代表的な祭りの一つである。祭は浅草神社で行われる(図1)。

浅草神社は、三人の神様を祀っているため、「三社さま」とも呼ばれる¹³⁾。浅草神社はもともと浅草寺と一体であったが、明治元年の神仏分離令によって別れた¹⁴⁾。浅草神社・浅草寺の創建は628年(推古天皇36年)とされる¹⁵⁾。浅草寺は、都内最古の寺院である¹⁶⁾。

三社祭は1312年に始められた船祭を起源としている¹⁷⁾。奉納舞踊等もあるが、大規模な神輿の練り歩きが広く知られている。現在の神輿は戦後に奉納されたものだが、震災で焼失した戦前の神輿は徳川家光によっ

て寄進されたものだった¹⁸⁾。ただし、かつては神輿の練り歩きがメインイベントだったのではなく、山車が中心だった¹⁹⁾。

明治5年から5月17日、18日に祭礼を行うようになった²⁰⁾。氏子各町に神輿の渡御を行う現在のスタイルになったのも、この時からである²¹⁾。

昭和38年以降は、例年、5月17日、18日に近い金曜から日曜にかけて行われている²²⁾。土曜日は、約100基の神輿の渡御が行われる（町会による神輿であり、「各町神輿連合渡御」という）²³⁾。最終日である日曜日には、浅草神社の神輿の渡御が行われる（「本社神輿渡御」という）²⁴⁾。

毎年人出は多く、賑わっている。例年三日間で150～200万人程度ということである²⁵⁾。2006年の人出は三日間で130万人、けがをしったり気分が悪くなったりした人は51人、うち34人が病院に運ばれた²⁶⁾。2008年は三日間合計で170万人だったという²⁷⁾。

担ぎ手は町会から出されるが、町会には同好会というものがあり、そこから出される²⁸⁾。浅草に住んでいない人でも、同好会を通して参加することができる²⁹⁾。担ぎ手の総数は定かでないが、2009年には、一般の担ぎ手だけで約一万人いたと報じられている³⁰⁾。

大いに盛り上がる一方、問題も生じている。神輿に乗る人が後を絶えないのである。2006年には神社側が「神輿乗り禁止令」を出した³¹⁾。にもかかわらず翌2007年にも神輿に乗る人が出た³²⁾。この年は、東京都の迷惑防止条例違反で一人が逮捕された³³⁾。このことがあったために、翌年の2008年は、本社神輿の渡御（「宮出し」という）は中止となった³⁴⁾。

こうして2008年は町会の神輿の渡御だけが行われた³⁵⁾。人出は例年並みだったというが、毎回参加している人や地域の人々はがっかりした様子だったようだ³⁶⁾。新聞の取材に対して、「いつもは宮出しの余韻で通りに緊張感がある。やっぱり三社祭らしさには欠ける」、「周りのみんなも全然元気がない。本社神輿を少しでも担ごうと、楽しみにやってくるんだから」、「宮出しがないと気持ちが盛り上がらない」等と答えている³⁷⁾。

神輿の「宮出し」は2009年に再開された。2009年も一時的に神輿に乗った人がいたが、大混乱はなく終了した³⁸⁾。2008年を除けば、少なくとも戦後、これまでに「宮出し」が行われない年はなかった³⁹⁾。

しかし、今年は震災の影響で警備員が足りないため、宮出しだけでなく、各町連合神輿の渡御も行われなかった⁴⁰⁾。したがって、今年の三社

祭は、戦後初の神輿渡御一切なしの祭ということになる。

4-2. 2011年と2006年の三社祭

以下では、2011年5月21日（土）、22日（日）の三社祭の様子を紹介する。21日は商店街の様子を観察した。この日、東京では日中は晴、最高気温27.6度であった⁴¹⁾。午前11時から午後1時頃までを分析対象とした。22日は主として境内の様子を観察した。この日、東京では日中は曇後雨、最高気温29.6度であった⁴²⁾。午前11時から午後3時過ぎまでを分析対象とした。

さらに本稿では、比較対象として、2006年に行われた三社祭の様子も紹介する。5月20日（土）午後3時前後の境内および通りの様子进行分析対象とした⁴³⁾。この日の東京では、日中は晴後一時雨であり、最高気温は28.1度であった⁴⁴⁾。

三社祭には様々な見どころがあるが、本稿では、商店街・消費者の様子、奉納舞踊等とその見物、神輿とその見物の三点に焦点を当てて述べる。商店街での買い物や散策は、祭の日か否かによらず浅草観光の重要な要素だが、祭の日には祭特有の感性的質が生じると考えられる。また、奉納舞踊等の見物と神輿の見物は、三社祭の主要な要素と考えられる。

(1) 商店街・消費者の様子

仲見世では、2011年5月21日、22日の両日とも、午前11時頃は人出が少な目であったが、11時40分頃から混雑し始めた（図4）。外国人観光客もわずかにいた。ただし日本人に案内されているようであり、外国人の団体観光客は見かけなかった。仲見世およびその界隈の商店では、一軒一軒、店頭に、「がんばろう日本 三社祭」と書かれた提灯が下げられていた（図5）。

2006年は2011年と比べてかなり混雑していた。外国人の集団も見かけた。救急隊の方々もいた。図6は仲見世の様子である。店頭に、2011年同様の提灯が下げられているが、「がんばろう日本」ということばはなかった。

(2) 境内における奉納舞踊等

2011年5月22日は午前11時から境内の神楽殿で「神事びんざさら舞」



図4 混雑し始めた仲見世
(2011/05/21)



図5 店先に下げられた「がんばろう
日本 三社祭」の提灯
(2011/05/21)



図6 仲見世の様子(推定2006/05/20)

の奉納が行われた。五穀豊穡を祈願する舞であり⁴⁵⁾、東京都の無形民俗文化財に指定されている⁴⁶⁾。観客は比較的多かったが、混雑というほどではなかった(図7)。舞台の脇の、赤い長髪のかつらを被った人物は、太鼓を叩く役である。図8は種蒔きの場面である。光る紙吹雪を種に見立てて観客席に散らしていた。

午後3時、突然激しい雨が降ってきた。気温も急に下がったようだ。取りあえず軒先で雨宿りしようとする人もいれば、急ぎ足で帰る人もいた。浅草寺の香炉の煙が、薄暗い雨を背景に白く立ち上っていた。

境内の神楽殿では3時から東京浅草組(芸妓衆)による奉納舞踊が行われる予定であったが、中止になった。代わってお囃子が奉演された。見物客はいたが、多いとは言えなかった(図9、図10)。

2006年も、2011年とほぼ同様のプログラムが組まれていた⁴⁷⁾。5月20日は、午後3時から境内の神楽殿で、芸妓衆による奉納舞踊が披露された⁴⁸⁾。多くの人が集まって見物していた(図11)。



図7 「びんざさら舞」の舞台
と観客 (2011/05/22)



図8 「びんざさら舞」
における種蒔き
の場面 (2011/
05/22)



図9 お囃子の見物客 (前方)
(2011/05/22)



図10 お囃子の見物客 (やや後方)
(2011/05/22)



図11 芸妓衆による奉納舞踊と見物客
(推定2006/05/20)



図12 境内で拝観できる三基の神輿
(2011/05/22)



図13 神輿を拝観する人々 (2011/05/22)



図14 通りを行く神輿と見物客 (推定
2006/05/20)



図15 神輿とその写真を撮る人々 (推
定2006/05/20)

(3) 神輿

2011年は、境内の奥で本社神輿が拝観できるようになっていた。一之宮、二之宮、三之宮の三基から成る(図12)。拝観している人は多いとは言えなかったが、写真を撮る人が時々いた(図13)。なお、境内のあちこちに震災義援金募金箱が設置されていたが、神輿の前にも募金箱があった。

2006年は、例年通りの賑やかな神輿渡御が行われていた(図14)。多くの見物客が取り巻いていた。高く腕を掲げ、写真を撮ろうとしている人も多かった(図15)。この年は、神輿に人が乗ったことが問題になった年だが、図14、図15の場面では、そのような人は見かけなかった。

5. 考察と今後の課題

本稿では、2011年および2006年の三社祭の中で、特に、商店街・消費者の様子、奉納舞踊等の見物、神輿の見物の三点について述べてきた。以下では、冒頭で紹介した Berleant and Carlson (*Ibid.*) の分類を適用し、三社祭の感性的質について考察する。すなわち、三社祭を、観察対象として知覚する場合と、自らがその場に関わる対象として知覚の場合に分け、それぞれの場合において顕著と考えられる感性的質について論じる(表1)。

まず観察対象としてとらえた場合、2011年は、全体的に賑やかさや活気に欠ける三社祭であったと言えるだろう。

昨今の浅草の特徴とも言える国際色は乏しかった。商店街は、消費者

表1 三社祭において顕著と考えられる感性的質

知覚対象	観察対象として		自らが関わる対象として	
	2011年	2006年	2011年	2006年
商店街・消費者	均質性、パターン性	賑やかさ、国際性・多様性	楽しさ、騒ぎの抑制傾向	楽しさ、賑やかさ、窮屈・不快
奉納舞踊等	静けさ、哀愁、印象深さ	(混雑のため、見づらい)	盛り上がりの欠如	盛り上がり、窮屈・不快
神輿	静けさ、見事さ	(混雑のため、見づらい)	(不可能)	盛り上がり、活気、窮屈・不快

が日本人だらけという点において均質であった。また、菓子店や有名料亭に立ち寄るといって、人々の行動が幾分パターン化されていたようだった。

だが奉納舞踊等や神輿の見物に関しては、2011年は、2006年に比べて、むしろ感性的側面の強いものになっていたのではないだろうか。神輿が練り歩かない分、娯楽的要素が減り、奉納の側面が前面に出されたと思われるからである。特に、見物客も少なく、雨降る肌寒い境内に鳴り響いていた最終日午後のお囃子は、どこことなく哀愁を漂わせていたのではないだろうか。雨にかすむ香炉の煙にも、しんみりとした趣があった。

これに対し、2006年の三社祭では、奉納舞踊も神輿も、押しつぶされながら見物することになり、そもそも観察者の視点から静観することが困難であった。

もっとも、2011年の神輿見物は、境内奥のエリアで拝観するという形をとっていたため、美術作品の鑑賞に近かったかもしれない。神輿を写真撮影していた人々（図13）は、神輿の造りの見事さや精巧さを認識したであろう。

では、知覚者自身が関わる対象として祭の風景をとらえた場合はどうだろうか。商店街では、2011年も、食品の購買や料亭での飲食は可能だったのであり、楽しさが感じられただろう。しかし、祭の日ならではの喧噪はなかった。三社祭用の提灯に「がんばろう日本」と書かれていたのも、境内のあちこちに義援金募金箱が置かれていたのも、過激なお祭り騒ぎを抑制する効果があったのではないだろうか。

ただし、2006年のような混雑状況では、商店街は楽しく賑やかであると同時に、窮屈で不快なものであったかもしれない。この種の否定的な感性的経験は、2011年はなかったと思われる。

奉納舞踊等に関しては、2011年は2006年に比べ、見物客の盛り上がりには欠けていた。ただしこれは、震災だけの影響ではなかった。最終日午後の舞台の見物客が少なかったのは、多くの人が、雨に濡れてしまう、寒い等の実際的な問題への対処を優先させたからだろう。一方、2006年は盛り上がっていた。しかし、ここでも、混雑による窮屈や不快感が生じていたかもしれない。

神輿に関しては、2011年は渡御がなかったため、そもそも自らが関わる対象として知覚することができなかった。これに対して2006年は、大

いに盛り上がっており、活気や賑やかさがあった。しかし、混雑に巻き込まれたり、見たいものが前の人の頭や腕に隠れて見えなかったり、という事態も生じていた。そのため窮屈や不快を経験した人もいただろう。

以上のことから、震災後に行われた2011年の三社祭を2006年の三社祭と比べると、感性的質の点で大きく異なっていたことがわかる。2011年は、2006年のような賑やかさや活気は欠いていたが、例年とは異なる感性的質を生じていた。この結果をふまえると、観光に関する感性論的な研究課題として、以下の三点があげられる。

第一は、本来その場にあるべきことが期待されている事物の欠如や不在によって生じる感性的質に関する課題である。2011年の三社祭では、芸妓衆の舞踊が中止になり、代わって雨中の舞台でお囃子が奉演されたことや、神輿の渡御が行われなかったことから、静けさや哀愁等の感性的質が見出された。

この現象は、震災の影響という問題に限らず、美学の様々な研究テーマと結びつく。例えば、日本古来の美意識に関して、「欠如の積極的な美的転換」という考え方(草薙, 1973)がある⁴⁹⁾。また、ノスタルジアの問題ともつながってくる。ノスタルジアの感情も、本来喪失感から生じるのであり⁵⁰⁾、一種の欠如と言えるからである。このように、より広い視野で、欠如や不在がもたらす感性的質について明らかにすることは、本稿の分析から見出された一つの研究課題である。

第二は、観光地で見聞きするものの「真正性」に関する課題である。津上(前掲書)においては、観光を美学研究の対象としてとらえるとき、「真正性」が対象のあじわいを深めることが指摘されている。浅草では、三社祭自体が歴史ある祭であり、「真正性」を有しているが、国際色豊かな、活気あふれる商店街の様子もまた、近年の浅草においては「真」だろう。

2011年5月現在の浅草に外国人が少ないことは、浅草に来る日本人観光客の感性的認識にも影響を与える。浅草の商店街を“消費の場”ととらえて知覚するとき⁵¹⁾、重要な構成要素である消費者層に変化が生じたことになるからである。またこれに伴い、その「場」で購入されることの多い商品の種類も、着物や置物から菓子等の食品へと変わってくる。このような浅草は、近年の浅草と、視覚的にも、聴覚的にも、明らかに異なる⁵²⁾。

津上（前掲書，pp.189-191）における「真正性」とは、過去に対して忠実であることを意味する概念であり、歴史のある過去が例としてあげられている。だが、直近の過去に忠実であることも、その「場」に期待される感性的経験を強めるのではないだろうか。今後の研究課題として、観光地の可変性と「真正性」の関係を明らかにすることがあげられる。

第三は、感覺的経験と感性的経験の区別に関する課題である。本稿では、2006年の三社祭について、賑やかさや活気、盛り上がりがあったと考察した。このような経験は、感性的経験と言うよりむしろ感覺的経験であると見ることもできそうである。だが2006年の三社祭は、興奮や熱狂等の感覺的経験だけでは説明しきれない。知覚者は、大勢で盛り上がる中で、“粋”や“江戸っ子”、“下町”等を感じ取ったであろう。それは、知覚者が多分に感性を働かせた結果と言える。

感性的経験と感覺的経験の区別は、祭のような場面において、特に難しくなると思われる。この問題については、静観による知覚対象と、自らが関わりつつ知覚する対象の区別（Berleant and Carlson, *Ibid.*）に留意しながら、さらに検討していく必要があるだろう。

付記

本稿は、平成23年度科学研究費助成基盤研究C「Souvenirに見る現代の消費の感性性」（研究代表者津上英輔）の一部として行われたものです。ご助言をいただきました成城大学文芸学部教授津上英輔先生に心より御礼申し上げます。

註

- 1) 津上英輔，2010，『あじわいの構造 感性化時代の美学』，春秋社。
- 2) Berleant, Arnould and Allen Carlson, 2007, “Introduction: The Aesthetics of Human Environments,” in Arnold Berleant and Allen Carlson (Eds.), *The Aesthetics of Human Environments*. Ontario: Broadview Press, p. 24.
- 3) Berleant and Carlson, *Ibid.*
- 4) 本節で紹介する外国人観光客数のデータは、全て政府観光局がインターネット上で公開している「訪日外客数」の集計結果に基づくものである（<http://www.jnto.go.jp/jpn>）。
- 5) 台東区ホームページで公開されている調査結果による（http://www.city.taito.lg.jp/index/bunka_kanko/bunkakanko/marketing）。

- 6) 2011年6月の時点では、震災後の台東区観光客データは存在していない。
- 7) 台東区ホームページ(註5)より。
- 8) 台東区ホームページ(註5)より。
- 9) 台東区ホームページで公開されている「平成20年度台東区観光マーケティング調査」の結果による
(http://www.city.taito.lg.jp/index/bunka_kanko/bunkakanko/marketing)。
- 10) 「平成20年度台東区観光マーケティング調査」(註9)に組み込まれている調査(調査協力:首都大学東京、大学院観光科学専修)である。
- 11) 気象庁ホームページ(<http://www.data.jma.go.jp>)によれば、この日の東京の最高気温は18.7度であり、日中の天気は薄曇一時雨だった。
- 12) 本稿掲載写真(図2-図15)は全て著者が撮影したものである。
- 13) 浅草神社ホームページ「浅草神社について」のサイト
(<http://www.asakusajinja.jp/asakusajinja/yuisho.html>)より。
- 14) 浅草神社ホームページ「浅草神社について」のサイト(前掲)より。
- 15) 浅草寺ホームページ「浅草神社について」のサイト(前掲)、浅草寺ホームページ「浅草寺について」のサイト(<http://www.senso-ji.jp/about>)より。
- 16) 浅草寺ホームページ「浅草寺について」のサイト(前掲)より。
- 17) 浅草神社ホームページ「三社祭」のサイト
(<http://www.asakusajinja.jp/sanjamatsuri>) および『いなせな浅草っ子のお祭りガイド』(お祭りミュージアム実行委員会編, 2011, 長崎出版)より。
- 18) 浅草神社ホームページ「三社祭」のサイト(前掲)より。
- 19) 浅草神社ホームページ「三社祭」のサイト(前掲)より。
- 20) 浅草神社ホームページ「三社祭」のサイト(前掲)より。
- 21) 浅草神社ホームページ「三社祭」のサイト(前掲)より。
- 22) 浅草神社ホームページ「三社祭」のサイト(前掲)より。
- 23) お祭りミュージアム実行委員会(前掲書)および読売新聞2006年5月21日付(朝刊)31面より。読売新聞は「都民版」のページである。以下、読売新聞からの引用は全て「都民版」のページである。
- 24) 読売新聞2006年5月21日付(朝刊)31面。
- 25) 浅草文化観光センターのお話による。
- 26) 朝日新聞2006年5月22日付(朝刊)33面。「東京」のページである。以下、朝日新聞からの引用は全て「東京」のページである。
- 27) 台東区観光課のお話および台東区観光マーケティング調査(註9)による。
- 28) 浅草神社問い合わせ係の方の回答およびお祭りミュージアム実行委員会(前掲書)による。
- 29) 浅草神社問い合わせ係の方の回答および実際に神輿を担いだ経験のある

人のお話による。

- 30) 読売新聞2009年5月18日付(朝刊)27面。
- 31) 朝日新聞2007年5月21日付(朝刊)35面。
- 32) 朝日新聞2007年5月21日付(朝刊)35面。
- 33) 読売新聞2007年5月21日付(朝刊)35面およびお祭りミュージアム実行委員会(前掲書)より。
- 34) 朝日新聞2008年5月19日付(朝刊)29面およびお祭りミュージアム実行委員会(前掲書)より。
- 35) 浅草神社問い合わせ係の方の回答による。
- 36) 朝日新聞2008年5月19日付(朝刊)29面。
- 37) 朝日新聞2008年5月19日付(朝刊)29面。
- 38) 読売新聞2009年5月18日付(朝刊)27面。
- 39) 浅草神社で神職の方に伺ったお話による。
- 40) 浅草神社で神職の方に伺ったお話による。
- 41) 気象庁ホームページ「過去の気象データ検索」のサイト(<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn>)より。
- 42) 気象庁ホームページ「過去の気象データ検索」のサイト(前掲)より。
- 43) 2006年の観察日時については正確に記録していないが、インターネット上で公開されている神輿渡御ルートや奉納舞踊等のプログラムを参照したところ(浅草情報サイト「浅草いーとこ」,
<http://www.asakusa-e.com/tokushu/tokushu32.htm>)、この日時であったと推定できた。
- 44) 気象庁ホームページ「過去の気象データ検索」のサイト(前掲)より。
- 45) 読売新聞2009年5月16日付(朝刊)33面。
- 46) 朝日新聞2011年5月21日付(朝刊)29面およびお祭りミュージアム実行委員会(前掲書)より。
- 47) インターネット公開されているプログラムを参照した(註43)。
- 48) プログラムを参照したところ(註43)、この日、奉納舞踊が3時から行われたことを確認できた。
- 49) 草薙正夫, 1973, 『幽玄美の美学』, 塙書房, p.237。
- 50) ノスタルジアが美学の研究テーマとなることについては、津上(前掲書)において詳しく検討されている。
- 51) 消費の「場」の問題については、美学会平成22年度東部会例会発表において若干の考察を試みた(牧野圭子, 「消費生活が営まれる場に生じる美的質」, 『美学』, 2010, 237号, p.153要旨掲載)。
- 52) Berleantは、都市環境の美学を掲げるにあたり、人々が集まる場所や、人々の活動によって発生する音声が、都市の本質的な構成要素になっていると指摘している。Berleantによれば、建物、通り、広場、におい、湿度

等の知覚対象と知覚される質 (qualities) が、人間の存在と合わさって、都市を構成しているという。ここで Berleant が想定している「都市」は、本稿における“消費の場”と共通する部分が大いと思われる (Berleant, Arnould, 2007, “Cultivating an Urban Aesthetic,” in Berleant and Carlson (Eds.), *Ibid.*, p. 90.)。

追記

約一ヵ月後の2011年7月9日(土)、10日(日)に、浅草寺で恒例のほおずき市が開催された。10日正午頃の様子を観察したところ、驚異的な暑さであったにもかかわらず、多勢の人で賑わっていた。外国人観光客がまだ少ないように感じたが(日本政府観光局の公開資料(註4)によれば、7月の訪日外客数は、前年比36.1%減である)、浅草文化観光センターで伺ったところ、外国人も結構来ているとのことだった。

浅草寺の境内に入ると、ほおずきの売店がぎっしりと並んでおり、ほおずきの束や鉢が所狭しと置かれていた。そしてあちこちから、売り子たちの元気な声が聞こえてきた。もはや静けさや哀愁は感じられず、従来通りの活気あふれる浅草になっていた。